

## 旧約に預言されている「御国の福音」の諸相

### ベレーシート

●私たちが星座を見る時、そこには無数の星が見えます。しかし、その一つひとつの星はそれぞれ遠く離れており、星の誕生した時も異なれば、すでに消滅してしまった星をも見ているかもしれません。遠く離れて見ているために、空間軸も時間軸もない同一平面上にある一つのピクチャー(絵)として私たちは見えています。聖書も同様で、やがて起こることの時間軸(時間的順序)を無視して一枚の絵を描くように記されています。しかし、そこに記された出来事は必ず時間軸の中で起こってくるため、すでに実現したこと、まだ実現していないこと、また将来のどのあたりで実現するのかといった神のご計画全体の大枠を、整理して知っておく必要があるのです。そうでなければ、私たちは、パウロの言うように、「空を打つような拳闘」をしたり、「決勝点がどこかわからないような走り方」をしたりすることになってしまいます。そうしたことを避けるためにも、これから起こることをできるだけ正しく理解する必要があるのです。

●「メシア王国」(=千年王国、御国の完成)についての学びをすることによって、聖書全体に記されている多くの事柄がバラバラではなく、すべてがつながっていることを発見するようになります。それだけでなく、確かな希望から来るぶれることのない、かつ自信をもった生き方ができるようになると信じます。いわば、メシア王国は神の歴史におけるマスタープランの要石(かなめいし)なのです。この要石が不明確であるならば、神のご計画全体も不明確となります。

●「千年」ということばが聖書の中で出て来るのは、ヨハネの黙示録 20 章だけです。そこには「千年」ということばが 6 回も繰り返されて使われています。重要な事柄にもかかわらず、全聖書の中でこの 1 章しか出てこないのです。そのためか、ある人々は千年王国の信ぴょう性を疑います。しかしこの黙示録 20 章の偉大な貢献は、旧約時代、新約時代で語られてきた神の約束(特にイスラエルの民に対して語られた多くの約束)の成就とその期間、つまり完成された御国(メシア王国)の期間が「千年」という限定された期間であることが啓示されている点です。この箇所は神のマスタープランを知る上で価値ある重要な箇所と言えます。また別の言い方をすれば、この章の理解が聖書の理解、神の歴史のマスタープランの理解を決定づけるとも言えるのですが、私たちはその理解がないばかりに、死んだ後のことがよく分からないということになってしまいます。「死んだら、天国に行く」という考えは、今日マスコミを通してこの世の考え方になって来ています。しかしその天国がどういう所なのか、多くの人々が確信をもって語るができないのが現状です。実はクリスチャンたちも同じレベルです。もし、「死んだら、天国へ行く」という理解だけで済ませてしまっているならば、神の備えられたすばらしい「御国の福音」を語り伝えることはできません。いわばサタンに目を眩まされている状態なのです。黙示録 20 章では御国の「祝福」については扱われていません。なぜなら、旧約聖書の預言書の中にそのほとんどが啓示されているからです。それらを一つひとつ丁寧に学ぶことによって、はじめてこの千年王国のすばらしさを知ることができるのです。そこで、このセッシ

## セッション 4

ョンでは、「御国の福音」のすばらしさについて、イエシュアの地上再臨前と再臨時と再臨後の三つに分けて、その祝福のいくつかを取り上げてみたいと思います。

### 1. キリストの地上再臨前の神の恩寵的祝福

●ゼカリヤは、本来、捕囚から帰還したユダの人々に神殿の再建の希望を与えて力づけるために起こされた預言者ですが、彼に与えられた主のメッセージは単なる神殿建設にとどまらず、「終わりの日」において神が完成されるヴィジョンを含んでいました。聖書には終わりの日に起こる多くの出来事が、時間的順序を無視して、まるで一つの平面上に複数の絵を描くような形で語られています。たとえば、ゼカリヤ書 12～14 章にはイスラエルの民が最終的にどのようにしてイエシュアをメシアとして受容するかが語られています。特に 12 章 10 節には「わたしは、**ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。**」とあります。すでに二千年前、イエシュア・メシアが復活して昇天された後に聖霊が傾注しています。それによってイエシュアをメシアと信じるユダヤ人と異邦人とからなる「教会」が誕生しましたが、再度、終わりの日にも聖霊が傾注されるのです。その目的はユダヤ人の残りの者が民族的に回心するためです。

●1948 年にイスラエルが共和国として国家的建国を果たして以来、今日、多くのユダヤ人たちが世界中からイスラエルに帰還しています。しかしそれは不信仰のままに帰還しているのです。1948 年以降に少しずつではありますが、ユダヤ人の中からイエシュアがメシアであることを信じるメシアニック・ジューと言われる人たちが出現するようになりました。しかしその数はユダヤ人たちの中ではごく少数です。ところで、なぜ神は神の民であるユダヤ人を世界各地から集めておられるのでしょうか。しかも不信仰のままの状態です。それは彼らをさばくためです。「さばくため」に彼らをイスラエルに帰還させているとはどういうことでしょうか。イエシュアをメシアであると信じなかった不信仰に対するさばきとして、神は彼らに、やがて反キリストによってもたらされる七年間の患難時代(特に後半の 3 年半の大患難時代)の試練を通させます。それはイエシュアがメシアであることに彼らの目を開かせるためです。キリストの再臨前に、彼らはイスラエルの地から再び「離散」を余儀なくされます。そのあたりのことを、イエシュアはマタイの福音書 24 章 15～22 節で次のように話されました。

15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、

(読者はよく読み取るように。)

16 そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。

17 屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。

18 畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。

19 だがその日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。

20 ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。

21 そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。

22 もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者の

## セッション 4

ために、その日数は少なくされます。(実際には、三年半です)

●七年間の患難時代が置かれているその目的は、神の民であるイスラエルが最終的に神に立ち返るためであり、どうしても必要な産みの苦しみのことです。旧約聖書においては、神の民であるイスラエルとユダの民の回復を何度も繰り返して預言しています。ところが、聖書を読んでもそのことになかなか気づきません。その一因は置換神学による弊害です。イスラエルとかユダということばが聖書の中に出て来ると、それをすべて教会、あるいは自分に置き換えて読んでしまうからです。今日も多くのクリスチャンがそのようにして聖書を読んでしまっているのです。そこから脱出するのは容易なことではありません。聖書のことばを解き明かす教師(牧師)たちが、置換神学の影響を多分に受けてしまっているからです。その置換神学によるゆがみが神のマスタープランの理解にも及んでいます。そのため特に、キリストの再臨とその後に来る千年王国が、置換神学においては意味のない曖昧な理解となってしまうのです。

●キリストの地上再臨の前に、反キリストによる大患難をくぐり抜けた 1/3 のユダヤ人は、ゼカリヤが「後の雨」と言った「恵みと哀願の霊」が注がれることによって、「自分たちが突き刺した者(イエシュア)」がメシアであったことに霊の目が開かれます。イエシュアを拒絶したことがどんなに大きな罪であったかを示されて「激しく泣く」のです。それは尋常ではない「苦しみを伴ったひどい悲しみ」となります。そうした民族的回心の後にイエシュアは地上再臨されるのです。

## 2. キリストの地上再臨時の神の恩寵的祝福

### (1) その日、主の足はオリーブ山の上に立つ

●ゼカリヤ書 14 章は心踊らされる最もエキサイティングな箇所です。特に、「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ」(4 節)との預言が、キリストの再臨の預言であることは明白です。メシアが天から降り立たれる場所は、かつてイエシュアが昇天されたオリーブ山です(使徒 1:10~12)。しかもその時、主はすべての聖徒たちとともに地上に来られるのです。その箇所を原文で見ると以下のようになっています。

インマーフ	ケド-シーム	コル	エローハイ	アドナイ	ウーヴァー
עִמָּךְ	כָּל־קְדוֹשִׁים		אֱלֹהֵי	יְהוָה	וְבָא
あなたと共に	聖徒たちが	すべての	私の神	主(が)	そして、来られる

●「すべての聖徒たち」と訳された部分を、口語訳は「もろもろの聖者」と訳し、新共同訳は「聖なる御使いたち」と訳しています。私見としては、おそらくこの両方が含まれていると考えられます。というのは、「私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき」(I テサロニケ 3:13)とか、「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」(ユダ 14)とあるからです。また「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき」(マタイ 25:31)という表現もあるからです。もし、使徒パウロが言

## セッション 4

うように「私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られる」とするならば、この「聖徒たち」とはいったいだれのことでしょうか。それは、主によってすでに空中に携拳された教会のメンバー(=キリストの花嫁)であると解釈するのが自然です。

### (2) 反キリストとにせ預言者は火の池に投げ込まれ、サタンは幽閉される

●バベルマゲドンの戦いの後に、「獣」と呼ばれる**反キリスト**と人々を惑わした**にせ預言者**は捕えられ、「硫黄の燃える火の池」に生きたまま投げ込まれます(黙示録 19:20)。また、悪魔であり竜と呼ばれるサタンは「底知れぬ所に投げ込まれ」、「千年の終わるまで」そこに幽閉されます(同 20:2~3)。

●「千年王国」(御国の完成)はサタンの幽閉から始まります。サタン(悪魔)を幽閉する目的は、「千年の終わるまでは、諸国の民を惑わすことのないように」するためです。しかしそれは消極的な面です。積極的な面は、神が約束された御国をこの地上で実現させるためです。神の民イスラエルに対してなされてきた約束がこの地上において完全に成就するためです。また、神を信頼して信仰を貫き通した者たちに、地上においてさばきを行う(統治する)権威を与えるためです。さらには、回復されたエデンの園の祝福を味わわせるためなのです。

●黙示録 20 章 6 節に、「第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。」とあります。「第一の復活」とは、千年王国で生きるための新しい朽ちることのない栄光のからだを与えられることを意味します。携拳された教会に属する者たちはすでに朽ちることのないからだに変えられていますから、文句なしに、この「第一の復活」にあずかっています。黙示録 20 章でいう「第一の復活」にあずかる者とは、大患難時代に悔い改め、イエシュアをメシアと信じて信仰を貫き、殉教した人々(異邦人、およびイスラエルの民)のことで、キリストの再臨の時にこの「第一の復活」にあずかることができます。

## 3. キリストの地上再臨の後の神の恩寵的祝福

### (1) 全イスラエルの最終的帰還の実現

●この地上において約束された御国が打ち建てられるために、世界の四隅に散らされたイスラエルの民を主は集められます。この預言は多くの預言者たちが語っていますが、ここではイザヤ書 11 章 11~12 節を引用したいと思います。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 11 章 11~12 節

- 11 その日、主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りを買い取られる。残っている者をアッシリヤ、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、海の島々から買い取られる。
- 12 主は、国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

## セッション 4

●旧約の預言は、靈的、比喩的にではなく、字義どおりに解釈されなければなりません。特に注目したいことは、11 節の「**再び**」ということばです。つまり、キリストの再臨の後に、「主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りを買い取られる。・・・主は、国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。」(11~12 節)ということが実現するという預言です。ここの「再び」ということばの解釈は重要です。ここでの「再び」とは、神のご計画における最終的成就として、世界に離散した全イスラエルが集められる(帰還する)ことと解釈します。再びと言うからには、すでに一度、帰還を経験しているわけで、その帰還については様々な解釈がありますが、ここでは、1948 年のイスラエル建国を意味していると理解します。

●全イスラエルの最終的帰還は神の再創造のみわざです。

【新改訳改訂第3版】 イザヤ書 43 章 5~9 節

5 恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしは東から、あなたの子孫を来させ、西から、あなたを集める。

6 わたしは、北に向かって『引き渡せ』と言ひ、南に向かって『引き止めるな』と言う。わたしの子らを遠くから来させ、わたしの娘らを地の果てから来させよ。

7 わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。

8 目があっても盲目の民、耳があっても聞こえない者たちを連れ出せ。

9 すべての国々をつどわせ、諸国の民を集めよ。彼らのうちのだれが、このことを告げ、先の事をわれわれに聞かせることができようか。彼らの証人を出して証言させ、それを聞く者に『ほんとうだ』と言わせよ。

●この箇所も、全イスラエルに対する最終的な帰還の呼びかけがなされています。東から、西から、北から、そして南から、世界中からの帰還が強調されています。特に 7 節にある、以下の三つの動詞に注目です。

①「**創造した**」—「バーラー」(בָּרָא) 創世記 1:1, 21, 27, 27, 27/2:4(この動詞は神の専属用語です)

②「**形造った**」—「ヤーツアル」(יָצַר) 創世記 2:7, 8, 19

③「**造った**」—「アーサー」(אָסַר) 創世記 1:7, 11, 12, 16, 25, 26, 31/2:2, 2, 3, 4, 18

●これらは、創世記 1~2 章に出て来る動詞です。神が天と地を創造された時の動詞がそのまま使われているのです。ということは、全イスラエルの最終的な帰還は、神の主権的な新しい創造のみわざとしてなされることを強調していると考えられます。全イスラエルの最終的な帰還は、イスラエルの全歴史のクライマックスです。こうした預言は旧約聖書の中に数限りなく語られているのです。

### (2) 「新しい契約」の実現

●千年王国(御国)の序曲として、全イスラエルの最終的な帰還が実現するということは、私たちにはなかなか理解できない、想像し得ない不可思議な出来事です。しかし神はご自身の約束を成就されます。と同時に、神が彼らに約束された「新しい契約」も成就されます。ここで言う「新しい契約」とはエレミヤが預言した

## セッション 4

ものです。この契約は千年王国において実現するのです。

【新改訳改訂第3版】エレミヤ書 31 章 31~34 節

- 31 **見よ。その日が来る。**——【主】の御告げ——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。
- 32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——【主】の御告げ——
- 33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御告げ——  
わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、  
彼らはわたしの民となる。
- 34 そのようにして、人々はもはや、『【主】を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。  
それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——【主】の御告げ——  
わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思いださないからだ。』

●「**新しい契約**」においては、エレミヤはその内実だけを指し示しています。その契約を成立させる仲介者についてもその方法についても不透明ですが、新約に生きる私たちは、それが神の御子イエシュアによって締結されたことを知っています。しかし、イスラエルの家とユダの家とに対してその「新しい契約」が完全に結ばれるのはこれからのことです。しかし、「見よ。その日が来る」のです。確実な終末論的希望が約束されています。この希望を使徒ペテロは「生ける望み」、使徒パウロは「栄光の望み」「永遠のいのちの望み」「祝福された望み」と表現しています。

### (3) 主のみおしえを喜びとして歩む御国の民

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 2 章 2~3 節、5 節

- 2 終わりの日に、【主】の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。
- 3 多くの民が来て言う。「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから【主】のこぼれが出るからだ。
- ・・・ 5 来たれ。ヤコブの家よ。私たちも主の光に歩もう。

●御国の民は、王なるメシアを礼拝するために、また主の「みおしえ」(「トーラー」**תּוֹרָה**)を聞き、そのおしえに歩むために、喜びをもって主の山に流れて来ます。このようなことはこれまでの歴史の中にはなかったことです。「すべての国々がそこに流れて来る」のは、ひとえに、「主はご自分の道を、教えてくださる」からです。エレミヤ書 31 章で預言された「新しい契約」によって、御国においては一人ひとりの心の中に神の律法(みおしえ)が書き記されます。すべてが「新しい心と新しい霊」の支配の中に置かれるために、人々はもはや「主を知れ」と言って、おのおの互いに教えることがなくなります。それはみな直接的に主を知るようになるからです(エレミヤ 31:34)。千年王国ではみことばの教師はいません。だれかから教えてもらう必要がないほどに、一人ひとりが主を知るようになるからです。そのことを民の視点から述べているのが、

## セッション 4

イザヤ書 2 章 3 節の「シオンからみおしえが出、エルサレムから【主】のことばが出るからだ。」というみことばだと考えられます。全地を統治される王なるメシアのみおしえが、千年王国においては常にエルサレムから流れ出て行くというのは、祝福の発信源がそこにあるからです。このことは初代教会がエルサレムから始まったこと、そして福音がエルサレムから全世界に宣べ伝えられて行ったことと非常によく似ています。

●御国の民たちが全世界から大河のように一つとなって、エルサレムに臨在するメシアのところに流れて来て、そのメシアのみおしえがエルサレムから再び全世界の諸国へと流れていく統治形態です。これはエゼキエルに与えられた神殿の敷居の下から流れ出るいのちの水の川のヴィジョン、すなわち「この川が流れて行く所はどこでも、・ ・ ・すべてのものが生きる。」(エゼキエル 47:1~12)とも連動しています。

●御国は「王国」ですから、そこには「王」がいて「民」がいます。そしてその民が烏合の衆とならないために、王の支配(統治)における基本的な取り決めとしての「憲章」(法)が存在します。天の御国(王国)の憲章(法)の特質は、御国の民の祝福にかかわるものであり、御国の民としての特権が保障されているものです。その「憲章」に基づく主のみおしえの中身については、実は、イエシュアがすでに語っておられるのです。マタイはそのみおしえを「山上の説教」(マタイ 5~7 章)としてまとめています。そこに目を留めたいと思います。「山上の説教」は私たちが御国にどうすれば入れるかという話ではなく、天の御国が実現した時に受けるであろう祝福と特権がいかなるものであるかが示されています。もし、今日の私たちが「山上の説教」を完全に実行しようとするならば、使徒パウロのように、「私は、ほんとうにみじめな人間です。」(ローマ 7:24)と告白せざるを得ないでしょう。しかしメシア王国(千年王国)では、「肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされる」ことが可能なのです。自分の力ではなく、御霊によって、人が神の要求に、神の基準に応えることのできる状況になるのです。そのような視点から、マタイの福音書の 5 章 3 節から始まる各節冒頭のイエシュアの祝福の宣言—「幸いなことだ、幸いだ、祝福されている」を意味する形容詞の「マカリオス」(μακάριος)の複数形「マカリオイ」(μακάριοι)で始まる八つの幸い—について、なにゆえに「幸い」なのかを見てみたいと思います。

- |                    |                 |       |
|--------------------|-----------------|-------|
| ① 「心の貧しい人々」        | 「天の御国は彼らのものだから」 | (現在形) |
| ② 「悲しむ人々」          | 「彼らは慰められるから」    | (未来形) |
| ③ 「柔和な人々」          | 「彼らは地を相続するから」   | (未来形) |
| ④ 「義に飢え渴いている人々」    | 「彼らは満ち足りるから」    | (未来形) |
| ⑤ 「あわれみ深い人々」       | 「彼らはあわれみを受けるから」 | (未来形) |
| ⑥ 「心のきよい人々」        | 「彼らは神を見るから」     | (未来形) |
| ⑦ 「平和をつくる人々」       | 「彼らは神の子と呼ばれるから」 | (未来形) |
| ⑧ 「義のために迫害されている人々」 | 「天の御国は彼らのものだから」 | (現在形) |

●「八つの祝福」の最初と最後は現在形で記されており、「天の御国は彼らのものであり続ける」「すでに、今も」というニュアンスです。②~⑦は未来形で記されており、「やがて、必ず」というニュアンスです。つまり、「幸いな人々」が天の御国の祝福をすでに享受していると同時に、未だ完全には享受しておらず、

## セッション 4

それが未来においては確実なことであるとして期待させています。ここで語られていることは、夢のような、ユートピア的な世界ではありません。メシア・イエシュアの再臨によって、必ず「なる」、必ず「起こる」という神のご計画です。もし、イエシュアの語る御国のみおしえを信じることが出来ないとするならば、かつてイエシュアがエルサレムの滅びを知って涙を流されたように、再び、悲しみの涙を流されるに違いありません。

### (4) 「普遍的平和」の祝福

●メシアであるイエシュアがこの世に来られたときに、そのことを最初に知らされたのは羊飼いたちでした。天の御使いは彼らに現われて次のように言いました。「恐れることはありません。今、私はこの民全体(イスラエルの民のこと)のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町(ベツレヘムの町)で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリスト(メシア)です。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」するとたちまち、その御使いといっしょに多くの天の軍勢が現われ、神を賛美して言いました(ルカ 2:14)。

「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」(天軍賛歌)

●この天軍賛歌は預言的賛歌です。というのは、この歌の預言はまだこの地上において完全に成就していないからです。この歌がこの地上で成就するのは、メシアが再臨された後の千年王国においてです。千年王国においては、「地の上に、平和が、御心にかなう人々にある」ということが成就します。ここで「平和」と訳されたギリシア語は「エイレーネー」(εἰρήνη)ですが、ヘブル語では「シャーローム」(שָׁלוֹם)ということばです。シャーロームとは、神がこの世界を創造され、その創造の頂点として造られた人間との交わりの世界の祝福を表わす総称です。換言するならば、エデンの園の回復のことです。

●本来のエデンの園には、「死」というものは存在しませんでした。そのエデンの園が回復するわけですから、千年王国においては基本的に「死」はないのです。基本的と言ったのは、少々説明しなければなりません。千年王国では、古いものと新しいものとが入り混じっているのです。主にあるクリスチャンはすでに朽ちることのない栄光のからだを与えられていますので、死ぬことは決してありませんが、千年王国の構成メンバーの中には新しく朽ちない復活のからだを持たない者も存在しています。つまり、大患難をくぐり抜けて千年王国に迎えられた者たちです。主を信じている者は死ぬことはありませんが、千年の間に信じない者も起こってきます。そのような者は百歳で死んでしまい、それ以上は生きられないのです。ですから、誕生して百歳になるまでに、王であるメシアを信じなければ、永遠の死に定められます。

●人間の罪によって、「死」が人を支配するようになりました。その結果、死の恐れから自分の身を守るために、敵意が生まれ、争いや戦いをするようになりました。人間だけでなく、その死という束縛は、被造物全体に広がり、弱肉強食の世界に変わったのです。人間が罪を犯すまでは、弱肉強食は存在しなかったのです。千年王国の到来は、そうした弱肉強食のない世界へと回復させるのです。



## セッション 4

●「普遍的平和」と言ったのは、すべての領域においてシャーロームが回復するからです。神と人とのかわりにおいて、また人と人とのかわりにおいて、また人間と動物とのかわりにおいて、また神の民と異邦人とのかわりにおいて、また、神の民であるエフライム(北イスラエル)と南ユダとのかわりにおいて、天と地のすべての領域において、神のシャーロームが回復する、そのことを指して、「普遍的」ということばを使っています。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 11 章 6~9 節

- 6 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。
  - 7 雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。
  - 8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。
  - 9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。
- 【主】を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

●メシアの統治の結果、もたらされる普遍的平和が詩的な表現で描かれています。

- ① 聖書では最も貪欲で残忍な動物として描かれている「狼」が、ここでは「子羊」とともに「宿る」とあります。「宿る」と訳された動詞は、「ともにえさを食べる」という意味です。千年王国時代はすべて草食です。
- ② 「ひょう」と「子やぎ」もともに伏しとあります。これも、今の時代ではあり得ない光景です。
- ③ 子牛、若獅子(ライオン)、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。子牛や肥えた家畜は野獣の格好の餌食ですが、食われることはありません。子どもが彼らを従えている光景です。メシアがこの地上を支配すると、すべての敵意は止み、野獣はその凶暴性を失い、弱い動物は安全に生きられるようになるのです。人間と動物(獣と家畜)が共存するのです。「追う」と訳された原語の「ノヘーグ」(גָּהַג)は、新共同訳のように「導く」とも訳されますが、「御す」という意味もあります。つまり、このことばは人間が動物との関係において優位性を保っていることを示しています。

●7 節の「雌牛と熊とは共に草をはみ、獅子も牛のようにわらを食う」という表現も平和的共存を表わしています。ここで文字通りに解釈するなら、肉食動物が草食動物に変わるということです。エデンの園の状態に回復すると、こういうことになるのです。8 節の「乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。」も大きな変化です。コブラやまむしと言えば、猛毒を持つ蛇です。それらに噛まれたとしても、全く無害の世界です。使徒パウロがローマへの旅の途中に難波して、マルタ島という所に漂着し、そこで彼はまむしに噛まれます。何の害もなかったために、それを見ていた人々は彼を「神さまだ」と言い出しました。マルコの福音書の最後に、イエシュアを信じる人々には次のようなしるしが伴うとしていくつかのしるしが挙げられていますが、その中に、「蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けない」というくだりがあります。それは、やがて訪れる千年王国(メシア王国)の祝福の先取りとして経験される必要があったことを示しています。

## セッション 4

●使徒パウロも人間と被造物の世界とのかかわりを、ローマ人への手紙 8 章 19 節で「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。」と述べています。ここにある「神の子どもたちの現れ」とは、23 節にある「私たちのからだの贖われること」を意味しています。人間のからだ贖われるとき、つまり、朽ちないものに変えられるとき、被造物全体が滅びの束縛から解放されるのです。そのため、弱肉強食による苦しみからも解放されるのです。

●今回はイザヤ書 11 章という一つの箇所から、やがて地上再臨されるメシアによってもたらされる「普遍的平和」という祝福の一つを学んだに過ぎません。旧約の預言書には、やがて起こることを告げている箇所が数多くあるのです。それを見つけ、そこから学ぶことによって、知れば知るほど驚きの世界があることに気づかされるのです。私たちはこれから起こることを正しく知り、信仰による希望をもって日々歩むことが必要です。やがて起こることに目を留めて生きることは、今日の毎日のニュースを数多く見聞きする以上にエキサイティングであり、価値のあることではないでしょうか。「御国の福音」は、私たちが語れば語るほど、ウキウキ・ワクワク・ドキドキ感が心のうちに湧いてくるのです。以下の有名な聖句を、「御国の福音」の視点から、改めて想像してみてください。特に 31 節です。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 40 章 28～31 節

28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。【主】は永遠の神、地の果てまで創造された方。

疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。

29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。

30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。

31 しかし、【主】を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。

走ってもたゆまず、歩いても疲れない。

●朽ちることのない栄光のからだを与えられるとき、文字どおりに、「走ってもたゆまず、歩いても疲れない」ということが起こるのです。何という希望でしょう。主に仕えることは、さらなる喜びとなるのです。

### (5) メシアが統治されるエルサレムを照らすシャハイナ・グローリー

【新改訳改訂第 3 版】ゼカリヤ書 14 章 6～7 節

6 その日には、光も、寒さも、霜もなくなる。

7 これはただ一つの日であって、これは【主】に知られている。昼も夜もない。夕暮れ時に、光がある。

●メシアの地上再臨によってもたらされる新しい世界(千年王国)は、人が想像し得ないような世界です。「夕暮れ時に、光がある」(7 節)とあるように、常に光が照らされて、夜がないのです。これはどういうことでしょうか。それは、旧約時代の幕屋が「昼は雲の柱、夜は火の柱」という形で主の臨在の顕現があったように、メシアが地上で王として統治される王国では、エルサレムを中心とする一帯が、「シャハイナ・グローリー」でおおわれるからだと考えられます。「来てください。沈むことのない光・・・」(コンスタンティノポリス近郊の大修道院の院長シメオン(949～1022 年)のことば)